

# 記 録

文書番号	SCJ 第 2 2 期-2 6 0 5 2 1-2 2 4 2 0 2 0 0-0 1 0
委員会等名	日本学術会議 心理学・教育学委員会 心の先端研究と心理学専門教育分科会
標題	検証「心理学分野の展望-学術からの提言 2 0 1 0」
作成日	平成 2 6 年（2 0 1 4 年）5 月 2 1 日

※ 本資料は、日本学術会議会則第二条に定める意思の表出ではない。掲載されたデータ等には、確認を要するものが含まれる可能性がある。

この記録は、日本学術会議心理学・教育学分野別委員会心の先端研究と心理学専門教育分科会の審議結果を取りまとめ公表するものである。

### 日本学術会議心理学・教育学委員会心の先端研究と心理学専門教育分科会

委員長	西田 眞也	(連携会員) NTT コミュニケーション科学研究所主幹研究員
副委員長	積山 薫	(連携会員) 熊本大学文学部総合人間学科教授
幹事	坂上 雅道	(連携会員) 玉川大学脳科学研究所教授
幹事	友永 雅己	(連携会員) 京都大学霊長類研究所准教授
	長谷川 壽一	(第一部会員) 東京大学理事・副学長
	松沢 哲郎	(第一部会員) 京都大学霊長類研究所教授
	仲 真紀子	(第一部会員) 北海道大学大学院文学研究科教授
	今井 むつみ	(連携会員) 慶應義塾大学環境情報学部教授
	入來 篤史	(連携会員) 理化学研究所脳科学総合研究センターチームリーダー
	内田 伸子	(連携会員) 十文字学園女子大学理事・特任教授
	岡ノ谷 一夫	(連携会員) 東京大学大学院教授
	亀田 達也	(連携会員) 北海道大学文学研究科教授
	行場 次朗	(連携会員) 東北大学文学研究科教授
	子安 増生	(連携会員) 京都大学大学院教育学研究科教授
	実森 正子	(連携会員) 千葉大学文学部教授
	利島 保	(連携会員) 広島大学名誉教授、
	松井 三枝	(連携会員) 富山大学大学院医学薬学研究部(医学)准教授
	開 一夫	(連携会員) 東京大学大学院総合文化研究科教授
	三浦 佳世	(連携会員) 九州大学大学院人間環境学研究院教授
	村上 郁也	(連携会員) 東京大学大学院人文社会系研究科准教授
	山岸 俊男	(連携会員) 玉川大学脳科学研究所教授
	山口 勸	(連携会員) 東京大学大学院人文社会系研究科教授
	山口 真美	(連携会員) 中央大学文学部教授
	吉川 左紀子	(連携会員) 京都大学こころの未来研究センター長
	渡辺 茂	(連携会員) 慶應義塾大学文学部教授
	渡邊 正孝	(連携会員) 東京都医学総合研究所特任研究員

報告書及び参考資料の作成にあたり、以下の方々に御協力いただきました。

箱田 裕司	(第一部会員) 九州大学大学院人間環境学研究院院長・教授
秋田 喜代美	(第一部会員) 東京大学大学院教育学研究科教授
苧阪 満里子	(第一部会員) 大阪大学大学院人間科学研究科教授
丹野 義彦	(第一部会員) 東京大学大学院総合文化研究科教授

芋阪 直行	(連携会員) 京都大学名誉教授
小西 行郎	(連携会員) 同志社大学心理学部教授
子安 増生	(連携会員) 京都大学大学院教育学研究科教授
仁平 義明	(連携会員) 白鷗大学教育学部教授

# 要 旨

## 1 作成の背景

「日本の展望-学術からの提言2010」に関して心理学・教育学委員会は「心理学分野の展望-人間社会の持続的発展にこたえるこころの科学の構築-」と題した報告を行い、心理学を中核とするこころの科学の発展を目指して、いくつかの重要な提案を行った。

## 2 現状及び問題点

報告から3年以上経ち、提案した内容に関していくつか具体的な進捗が見られた。心理学分野の持続的な発展を目指すためには、現在の進捗状況を確認し、今後の目指すべき方針を明確化する必要がある。

## 3 記録の内容

### (1) マスタープランに関する取り組み

マスタープラン 2010, 2011 に「心理学分野の展望」をベースにしたプロジェクトである「心の先端研究のための連携拠点 (WISH) 構築」が採択された。また、マスタープラン 2014 においては、心理学委員会から提案された複数のプランが採用された。

### (2) こころの科学のネットワーク型拠点の整備に関する取り組み

「心理学分野の展望」は、日本のこころの科学を国際的に競争力のあるものにするため、国内の心理学および関連研究分野をオールジャパン体制で統合する拠点を形成し、日本独自のこころの科学を発信する体制を作るべきであると指摘した。WISHプロジェクトはそれに呼応した活動で、最先端研究基盤事業にも選定され、こころの科学のネットワーク型拠点の構築が大きく進んだ。

### (3) こころの科学の「扇の要」としての心理学に関する取り組み

「心理学分野の展望」は、新しい学際的な心の研究において、こころを最も直接的に科学する心理学が、ゲノム科学、神経科学、ロボティクスなどと連携しながら、全体をまとめる扇の要のような役割を果たすべきであると指摘した。マスタープラン 2014「融合的社会脳研究センター構想」や、人間のさまざまな様相に焦点をあてた学際的な新学術領域研究などにおいて、心理学が扇の要の役割を果たす具体的な姿がより明確になってきた。

#### (4) 基礎研究と実践研究の相補的連携に関する取り組み

「心理学分野の展望」は基礎研究と実践研究の相補的連携がこれからの心理学にとって非常に重要であると指摘した。それに呼応するように、発達、経済、政治、法といった分野で、現実問題を心理学的に解決する試みが盛んになってきた。

#### (5) 心理学教育に関する取り組み

「心理学分野の展望」は、大学・大学院における心理学教育の充実、中学・高校における心理学的教育の導入、および国家資格の整備などの必要性を指摘している。これに関わる啓発活動や学術会議での議論が進んでいる。心理学を含んだ総合人間学の新たな教育スキームを目指したリーディング大学院も立ちあがりつつある。

## 目 次

1	作成の背景	1
2	マスタープランに関する取り組み	2
3	こころの科学のネットワーク型拠点の整備に関する取り組み	3
(1)	研究組織間の連携に関わる活動	3
(2)	研究組織内の連携に関わる活動	4
4	こころの科学の「扇の要」としての心理学に関する取り組み	4
(1)	背景	4
(2)	マスタープラン 2014 に関わる活動	5
(3)	新学術領域研究などに関わる活動	5
(4)	脳神経科学との関係について	7
5	基礎研究と実践研究の相補的連携に関する取り組み	7
(1)	背景	7
(2)	マスタープラン 2014 に関わる活動	8
(3)	分科会に関わる活動	8
6	心理学教育に関する取り組み	9
(1)	背景	9
(2)	初等・中等教育における心理学教育に関する活動	9
(3)	大学・大学院の心理学教育に関する活動	10
(4)	心理学専門職の国家資格化に関する活動	11

## 1 作成の背景

「日本の展望-学術からの提言2010」の作成は、21期（2008～2011年）の日本学術会議の最重要課題の一つであった。心理学・教育学委員会では心理学分野の展望をまとめるための機関として「日本の展望心理学分科会」を設置し、2010年に「心理学分野の展望-人間社会の持続的発展にこたえるこころの科学の構築-」と題した報告を行い、心理学を中核とするこころの科学の発展を目指して、いくつかの重要な提案を行った。報告から3年以上経ち、22期（2011～2014年）も最終年度に入る。その間に、提案した内容に関していくつか具体的な進捗が見られた。心理学分野の持続的な発展を目指すためには、現在の進捗状況を確認し、今後の目指すべき方針を明確化する必要がある。

2013年10月3日に行われた心理学・教育学委員会において本記録の作成が提案され、心の先端研究と心理学専門教育分科会に付託することが決議された。これを受けて分科会では原案を起草し、心理学関係のほかの分科会委員などにも意見を求めて、本記録を作成した。

本記録で検証の対象となる「日本の展望-学術からの提言2010」の内容は以下のように要約される。

まず、心理学のあるべき姿について、以下の二つの指針が挙げられた。

(0.1) 心理学は、「内観としてのこころ」に正面から向き合う唯一の実証科学として、脳研究、ロボティクス、ゲノム研究など、こころに対する多様な科学と連携し、こころの科学の「扇の要」としての役割を果たしていくべきである

(0.2) 臨床（応用）と学問（基礎）の連携を強め、日々の暮らしに根ざした問いから研究を発掘し、心理学研究の成果を人々の暮らしに役立てていくべきである。

続いて、心理学に対する社会からの要請にこたえる方策として、以下の提案がなされた。

(1.1) 初等・中等教育において心理学的なものの考え方を導入する

(1.2) 大学の心理学教育のカリキュラムを改革し、国際水準の高度心理専門職を確立する

(1.3) 社会の変化に対応する基礎研究と実践研究の迅速な相補的連携体制を作る

(1.4) 心理学的知見に基づいた社会システム構築論を提案する

また、心理学における国際化に関して、以下の提案がなされた。

(2.1) ネットワーク型拠点を整備し、先端研究を推進し心理学専門教育を行う

(2.2) 研究成果を国際的に発信する

(2.3) 外国人研究者を育成し、外国人教員を積極的に雇用する

(2.4) 外国人留学生への対応の質を向上させる

最後に、心理学における若手の養成に関して、以下の提案がなされた。

(3.1) 先端研究拠点間の連携により、新世代の研究者を育成する

(3.2) 世界の研究者と一体となって研究を推進する日本発のオリジナルな研究を育成する

(3.3) 心理学を核とした新しい学際研究を創出する

(3.4) ポスドクへの財政的支援状況を改善する

(3.5) 新たな職域とキャリア・パスの形成を進める

(3.6) 高等教育に関わる学術政策そのものの点検を求める

以下、「日本の展望」に密接に関わるマスタープランに関わる取り組み、(2, 1)や(3. 1-3)などに関係するところの科学のネットワーク型拠点の整備に関する取り組み、(0. 1)などに関係するところの科学の「扇の要」としての心理学に関する取り組み、(0. 2)や(1. 3-4)などに関係する基礎研究と実践研究の相補的連携に関する取り組み、そして(1. 1-2)や(3. 5)に関係する心理学教育に関する取り組みについて述べる。

## 2 マスタープランに関する取り組み

21 期には「日本の展望-学術からの提言 2010」とともに、二つの学術の大型研究計画に関するマスタープランが策定された。2010 年の提言「学術の大型施設計画・大規模研究計画—企画・推進の在り方とマスタープラン策定について—」（「マスタープラン 2010」）と、それに続く 2011 年の報告「学術の大型施設計画・大規模研究計画マスタープラン 2011」（「マスタープラン 2011」）である。心理学関係では「心の先端研究のための連携拠点(WISH)構築」が採択された。

また、その3年後、「日本の提言 2010」の実現をより意識して策定された「第 22 期学術の大型施設計画・大規模研究計画に関するマスタープラン」（マスタープラン 2014）においては、WISH が継続の学術大型研究計画（区分Ⅱ）となったほか、新規の学術大型研究計画（区分Ⅰ）192 件の中に、「「汎いのち学」研究・教育推進拠点の形成—伝統知による地球環境の世代間継承」（教育学委員会からの提案）、「科学的な法の実務を支える研究・研修システムの構築」（心理学分科会からの提案）、「融合的社会脳研究センター構想」（心理学委員会からの提案）、「顔認知研究による社会性の理解と支援」（心理学委員会からの提案）、「「乳児発達保育実践政策学」研究・教育推進拠点の形成—発達基礎の解明に基づく乳児期からの良質な保育・養育環境の構築（教育学委員会からの提案）、「こころの健康社会を創る多次元プレイプロジェクト：機能ネットワーク解析に基づく精神・神経疾患の革新的予防・治療法開発拠点の形成」（基礎医学委員会からの提案）など、心の研究に関するものが多く採択された。そのうち、「「乳児発達保育実践政策学」研究・教育推進拠点の形成—発達基礎の解明に基づく乳児期からの良質な保育・養育環境の構築」と「こころの健康社会を創る多次元プレイプロジェクト：機能ネットワーク解析に基づく精神・神経疾患の革新的予防・治療法開発拠点の形成」は、重点大型研究 27 件の中にも選ばれている。

心の研究はいわゆるスモールサイエンスといわれる分野であるが、上述のマスタープランの策定過程で、長期的、共同的、および分野横断的な大規模研究の重要性が研究者間で広く議論され、目標が定められ、実現に向かった動きが進みつつあることの意義は大変大きい。

### 3 こころの科学のネットワーク型拠点の整備に関する取り組み

#### (1) 研究組織間の連携に関わる活動

「心理学分野の展望2010」は、日本のこころの科学を国際的に競争力のあるものにするため、国内の心理学および関連研究分野をオールジャパン体制で統合する拠点を形成し、日本独自のこころの科学を発信する体制を作るべきであると提案した。それに呼応した活動が、「心の先端研究のための連携拠点（WISH）構築」である。WISHは、心理学・認知科学等を実施する大学等の研究機関が連携して、ヒト、チンパンジー等の比較認知実験等を行うネットワーク研究拠点を整備し、心理学、認知科学、脳科学や社会科学の分野を超えた学際研究を行い、他者との相互作用による心のはたらきを解明するための先端研究を推進することを目的としたプロジェクト計画である。WISHは日本学術会議マスタープラン2010において学術の大規模研究計画に採択され、翌年の小改訂（マスタープラン2011）においても継続採択となった。さらに、これが基礎となって、平成22年度より平成24年度にかけて最先端研究基盤事業が実施された。

WISHの最先端研究基盤事業により、大きく2つの設備群が京都大学に導入された。一つは、チンパンジーやボノボを対象とした比較認知科学研究を推進するための「比較認知科学実験設備」である。これらは京都大学霊長類研究所に2基、そして京都大学熊本サクチュアリに2基が導入された。これまでの大型類人猿を対象とした比較認知科学研究は、主として1個体ないしは少数の複数個体を実験ブースに誘導して認知実験を進めるというものであった。それに対し、ここで導入された比較認知科学実験設備は、飼育環境と実験室を一体化したものであり、チンパンジーやボノボが、「いつでもどこでもだれとでも」実験ができる環境の構築を目指したものである。一群のチンパンジーたちが暮らすエリア全体を超大型ケージで囲い、そこに隣接する形で実験スペースを用意し、チンパンジーが自由に出入りできる「ウォークインブース」を設置した。チンパンジーたちは、普段の生活を過ごしながらか、誰もが、実験をしたい時に、どのブースに入っても実験ができるようなシステムを構築した。顔認証を用いた個体識別や、これらのシステムをネットワークで連携することにより、多くの研究者が大型類人猿の比較認知科学研究に共同で参画する基盤を構築することができた。

また、平成25年には、京都大学熊本サクチュアリに、日本で初めて1群のボノボが導入された。このことにより、チンパンジー、ボノボ、ヒトというヒト科3種の比較研究の推進がこのWISHを軸にしてさらに進展していくことが期待される。これらの設備群を、京都大学リーディング大学院プログラム「霊長類学・ワイルドライフサイエンス」や日本学術振興会の拠点形成事業などと有機的に関連させていくことで、若手人材や国際的な人材の育成に寄与することが期待される。

WISHにより導入されたもう一つの設備は「遠隔地fMRI連携設備」である。これについては、平成23年度に、連携の中核となるfMRI装置本体1台を、京都大学こころの未来研究センターの隣接地に設置した。これによって平成24年度より、本fMRIを利用した心理学・認知科学研究の推進が始まった。社会的交渉実験とその脳活動の記録、他者の心を理解して互恵的にふるまう行動の基盤の探索などを中心に共同研究が軌道に乗りつつある。さらに、

本装置と連携するMRI装置が東京大学進化認知科学研究センターと北海道大学社会科学実験研究センターに導入されることになり（平成24年度補正予算による措置、平成25年度末に納入）、平成26年度以降、これらの3台のMRIを連携してこころの先端研究をすすめていくためのネットワーク基盤が構築されつつある。

## (2) 研究組織内の連携に関わる活動

WISHに連動して、各大学内のさまざまな部署で行われているこころの研究を統合する試みも進んだ。京都大学では、平成22年度より、心の先端研究ユニットという名の下に、学内の心の研究に携わる教員の連合体を作った。心理学、認知科学、脳科学や社会科学の分野を超えた学際研究を行い、物理的・社会的環境との相互作用による心のはたらきを解明するための先端研究を推進すること、またそれと並行して、心理学専門教育の充実をはかることで後進を育成しつつ、現代社会が抱える多様な心の問題の実践的な解決を図ることを目的にした組織である。WISHプロジェクトの中核連携拠点の一つとしての役割も持っている。同様の学内連合の動きは、東京大学や熊本大学でも進んでいる。

## 4 こころの科学の「扇の要」としての心理学に関する取り組み

### (1) 背景

「心理学分野の展望2010」では、心理学の果たす役割が大きなテーマのひとつであった。

近年の学問の進歩にともないこころの理解のためにいろいろなアプローチが選択できるようになった。ゲノムがこころを規定する様式を理解する、脳神経回路がこころを作り出す仕組みを理解する、こころの進化を分析する、社会というコンテキストでこころをとらえる、人工知能やロボットとしてこころを新たに構成する、などである。

新しいこころの研究においても、心理学で培われてきたさまざまな知識が基礎となっている。強化学習や社会行動など、心理学が開拓してきたこころの機能や働きを、新しい概念や方法で再検討するという構図が一般的に見られる。また、心理学的測定法や行動形成法など、心理学から生まれた手法も広く用いられている。その意味で、近年のこころに関する研究はすべて、現在版の心理学なのだという風に理解することも出来る。実際、若い優秀な心理学出身の研究者には、機能イメージングやゲノム解析、ロボティクスに代表される新しいアプローチを好む人が多い。一方で、伝統的な心理学は、新しい心の研究の流れにのみ込まれ消化されて、その存在意義が失われつつあるのではないかという懸念も耳にする。

心の理解には複数のレベルがある。どれか一つが正解というわけでは無い。異なるレベルの理解は相互に関係し合うが、互いに競合しあう必要は無い。複雑な心の全体像を理解するには、多層複眼的に理解することが有効である。そういう理解の仕方において、「原寸大のこころ」、「内観としてのこころ」をとらえる心理学的な理解は、ほかの学問に置き換える必要は無いし、置き換えることはできない。

そして、学際的な心の理解において、こころに最も近い位置にいる心理学が、全体をま

とめる扇の要のような役割を果たすことが期待されている。

## (2) マスタープラン 2014 に関わる活動

マスタープラン2014「融合的社会脳研究センター構想」においても、扇の要としての心理学の役割が強調されている。「脳と意識」分科会より提案されたこの構想の目的は、社会性を担う脳の働きを人文社会科学も取り込んだ「融合社会脳」の立場から解明することにある。「生物脳」は研究の進展につれて、文化や道徳などを担う脳の働きの探求に向かいつつあるが、社会という壁が研究進展を阻んでいる。この状況を打破するため「社会脳」研究との融合的展開を図り、広域複雑化する現代社会を視野に入れながら、fMRI, fNIRS, TMS, tDCSやhyperscanningなどの「理系のクワで豊かな文系の畑を耕す」新たな融合的社会脳科学の分野を開拓する必要がある。たとえば、報酬期待から生み出される動機の脳内機構の解明、自己と他者の脳内表現、創造的思考、良心・道徳などの社会規範や文化・宗教の脳内表現、心理、倫理、経済、発達、加齢や文化などを融合社会脳の切り口から、とくに前頭葉の機能を中心に捉える新たな心理学への脱皮が必要である。融合的社会脳研究センターの目標は「社会脳」研究に学際的なサイエンスの光をあて、人文社会科学の諸領域を知の統合のプラットフォームに乗せ、認知科学、情報学や脳科学と協働する認知心理学、神経経済学、神経倫理学、神経哲学、神経教育学、神経美学、神経加齢学、神経文学、神経社会学、神経発達学、神経注意学、神経生理学や神経社会ロボット工学という新たな学問を創生し「融合的社会脳」研究の展望を拓き、理系と文系にまたがる新たなヒューマンサイエンスを立ち上げることである。

## (3) 新学術領域研究などに関わる活動

また、扇の要としての心理学という構図は、以下に紹介するいくつかの心の研究に関する新学術領域研究にあてはまり、実際に機能している。

「学際的研究による顔認知メカニズムの解明 (H20-H24)」では、顔認知機能の解明を目指した検討を、心理学、脳科学、医学、工学、情報学などの幅広い分野の学際的な研究から行った。領域を推進する計画班は、電気生理・血流計測・臨床・動物（神経生理と行動実験を含む）・心理・工学で構成され、多くの公募班から多様な観点により顔認知の発展を推進した。この領域の基本理念は「顔認知」という心理学的課題であり、その神経基盤を神経生理学や脳磁図、血流計測 (fMRI)・近赤外線分光法 (NIRS) など脳科学に求めながら、社会性の障害といった臨床応用に推進するハブとして心理学は貢献した。この領域から生み出された「顔認知に基づく社会性の障害の理解と学習支援」の成果に関しては、心理学から医療への橋渡しとする課題として「顔認知研究による社会性の理解と支援」としてマスタープラン 2014 に採択されている。

「人とロボットの共生による協創社会の創成 (H21-H25)」は、比較的若い2つの研究領域-ヒューマン・ロボット・インタラクション(HRI)と学習科学(LS) -を融合し、人と人、人とロボットが互いを育て合う「ヒューマン・ロボット・ラーニング」の創出を目指したものである。このプロジェクトにおいては、人と人、人とロボットの相互作用場面を実証

的に捉えることが重要であり、心理学・発達科学・認知科学がHRIとLSを繋ぐための要としての役割を果たした。

「質感認知の脳神経メカニズムと高度質感情報処理技術の融合的研究 (H22-H26)」は、視覚、聴覚および触覚を介して、光沢感、透明感、滑らかさ、材質感、高級感、安心感といった質感を、高次元の感覚情報に基づいて人間がどのように感じ取るのかを科学的に理解し、その知識をものづくりにフィードバックしようというものである。心理(物理)学は、工学および神経科学と並んでこの領域の3本柱の一本を構成し、多岐にわたる研究者が混在する領域を概念的に接合する「扇の要」の役割を果たしている。

「共感性の進化・神経基盤 (H25-H29)」では、人の高度な社会生活を可能にする最も基本的、原初的な道徳感情として古くから議論されてきている共感に関して、その基礎に横たわる情動伝染から、高次認知機能の修飾を受ける同情までを包含する、共感の中核とした情動システム (empathetic systems) の働きを、マウス、ラット、トリ、イヌ、チンパンジー、ヒトを含む多様な動物種を対象に連続的に取り扱う。この研究では、心理学の研究者が、神経科学、神経内分泌学、神経生理学、遺伝学、動物行動学、比較認知科学、進化生物学などの研究者と協同することで、①ヒト社会における共感性の成り立ちを調べ、②共感性の系統発生的ならびに個体発生的な獲得過程を明らかにし、③共感性を神経回路、ニューロン、分子、遺伝子レベルで解明することを目的としている。

「こころの時間学 ー現在・過去・未来の起源を求めてー (H25-H29)」では、は、人間や動物の時間認識についての実証的な学際領域研究として、過去・現在・未来の認識やその神経メカニズム、病理病態、言語学的・認識哲学的理解、比較動物学的アプローチを有機的に組み合わせて研究を進めている。そのうち心理学の専門研究者は、主に健常成人の主観的現在の認知に関する知覚実験研究と、人間の発達過程および類人猿における時間認知に関する行動学研究で貢献している。その他、専門とする心理学的研究手法の他研究分野への応用および、他研究分野の提案モデルの心理学的実証などといった、相互作用の可能性を模索している。

そのほか、「予測と意思決定の脳内計算機構の解明による人間理解と応用 (H23-H27)」、「法と人間科学 (H23-H27)」、「構成論的発達科学ー胎児からの発達原理の解明に基づく発達障害のシステムの理解ー (H24-H28)」においても、心理学は重要な役割を果たしている。

「革新的技術による脳機能ネットワークの全容解明プロジェクト」は神経細胞がどのように神経回路を形成し、どのように情報処理を行うことによって、全体性の高い脳の機能を実現しているかについて、我が国が強みを持つ技術を生かして、その全容を明らかにし、精神・神経疾患の克服につながるヒトの高次脳機能の解明のための基盤を構築することを目的として実施する国家プロジェクトである。しかし、たとえ全脳同時計測が可能になっても、脳の最終出力である行動やこころの活動の計測を従来のものから大きく進歩させないと、バランスのとれた総合的な脳の理解には到らない。心理学にはこの分野の革新的技術を生み出す試みを積極的にリードしていく責務がある。

#### (4) 脳神経科学との関係について

本節の最後に、脳神経科学と心理学の関係について、さらに一言付け加えたい。

心は脳神経の活動によると考える現代人は、もはや少なくない。米国の著名な神経科学者のひとりである、ナンシー アンドリアセンも、その著書の中で、『精神疾患のために苦しんでいる人々は、意志が弱かったり、怠け者であったり、性格が悪かったり、生まれ育ちが悪いということではなく、病んだ、あるいは故障した脳のために苦しんでいるのである』（『故障した脳』26頁）と述べている。

神経科学は、脳の構造を理解し、物理化学的活動を測定する方法を飛躍的に進歩させて来た。しかし、脳活動の測定法がいかに進歩しても、機能を特定し、定量化することができなければ、脳神経科学が心の理解に貢献することは難しい。事実、認知心理学の成果は、脳損傷、精神疾患患者の機能障害の理解に多大な貢献をしてきた。神経ネットワークの動的変化を通して、学習や記憶がどのように形成されるかを調べる最新の技術を使った研究の根幹を支えるのは、行動主義とそれに続く長年に渡る動物を使った実験心理学の理論である。

もはや、心の科学的理解に神経科学、遺伝子工学の技術が大きな役割を果たすという流れは、大きくなる一方である。その中で、心理学は心の機能に関する現象的記述と理論を提供するだけでなく、神経科学、遺伝子工学と密に連携し、そのための新しい心理学教育も考えていかなければならない。MRIをはじめとする最先端機器の心理学研究の現場への導入も始まったが、十分というにはほど遠い。学際的に大きな貢献を果たし、いまや学習記憶研究の最先端を支える動物実験施設にいたっては、それを持つ心理学研究室の数は減少に歯止めがかからない。その意味でも、学際的最先端研究を行い、また、それを可能にする研究者養成の場となる、国立研究所の設立は、急がれなくてはならない。

### 5 基礎研究と実践研究の相補的連携に関する取り組み

#### (1) 背景

心理学はその独自性を掲げて他分野との差異化を図るとともに、分野を超えて連携し、総合的な心の研究を推進すべきであり、その核となるのが、「心の科学の現場への応用」と同時に「現場から発想した心の科学の育成」という双方向の発想である、と「心理学分野の展望2010」は述べている。そして、現実の社会が抱える問題、現代に生きる人々が抱える心の課題の中に研究の種を見つけ、その種を基礎科学として育て上げ、科学的証拠に基づき検証し、こうして得られた「学問知」（学芸知）を現代社会の課題を解決するための「臨床知」（実践知）へと転換させ、学問の場と実践の場を双方向に連関させる試みを推進していくべきだと提案している。

## (2) マスタープラン 2014 に関わる活動

マスタープラン2014の大規模研究計画に採用された、教育学委員会からの提案「乳児発達保育実践政策学」研究・教育推進拠点の形成」は、乳児期に関する発達科学研究にもとづき、子どもたちのための良質な保育・養育環境ならびに保育実践・保育制度を検討する「乳児発達保育実践政策学」を樹立し、当該学問領域の若手研究者の養成と学術研究にもとづく乳児期からの保育・教育方法や保育行財政制度政策の提言を行う研究拠点を形成することを目的とする。臨床・実践と基礎・調査、そして人材育成が一体となった大規模計画であり、学問の場と実践の場の連携が大きな特徴となっている。

## (3) 分科会に関わる活動

発達心理学分科会でも思想を同じくした取り組みが進んでいる。発達心理学は、人が生まれ、育ち育てられ、子育てを行い、看取り看取られていく、生涯のすべての過程に関わり、学術の高みではなく、生活の視点に立つものである。発達心理学分科会では、発達心理学と社会との関わりを明確にし、発達心理学の立場から人の生涯のすべての過程に対してどのような提言ができるかという観点から、『心が育つ環境をつくる：発達心理学からの提言』と題した提言をまとめ、これを単行本として出版社から刊行した（子安増生・仲真紀子編、2014年3月、新曜社刊）。本書では、日本学術会議心理学・教育学分野別委員会の発達心理学分科会の10人の委員を中心とし、また子どもの教育に関わる2名の執筆者をくわえて、高度の専門性と見識を持った研究者が、「心が育つ環境」というテーマで政府に対する政策提言や世論に対する啓発を行っている。その内容は、子どもの心の健やかで知的な発達をいかに導くか、乳幼児保育における家庭と社会の役割、いじめ予防教育をいかに学校に根づかせるか、個性に合わせた発達環境設定、早期外国語教育への警鐘、司法・福祉の面接場面で子ども・知的障がい者にどのような配慮が必要か、地域文化を世界とむすぶ語り教育の提案、「経験」「知恵」「技」「人間力」の世代継承の重要性、超高齢社会の基盤を強くする教育アプローチ、幸福感をいかに向上させるか、など多岐にわたっている。本書において、執筆陣は、普通の生活者の目線に立ちつつ、学術的証拠（エヴィデンス）を基礎に、社会における問題の解決をどのように実現するかという具体的提言をおこなっている。

「心理学分野の展望2010」では、心理学が、経済学・政治学・法学などの社会科学領域と連携することで、社会的制度設計の基礎となり得る人間モデルを提案するという提案もなされた。この方向については、実験社会科学分科会において活動が進められた。当分科会の委員は、科学研究費特定領域研究「実験社会科学 ― 実験が切り拓く21世紀の社会科学」（平成19年度～平成24年度）の中核メンバーを兼ねることで、実験心理学・社会心理学・経済学・政治学・社会学・経営学・法学・進化生物学の研究者が結集する新学術領域『実験社会科学』を立ち上げるべく、多様な活動を行った。具体的には、①実験社会科学カンファレンス、実験社会科学サマースクールを毎年開催、②行動経済学会との合同大会の実施、③2013 Asia-Pacific Economic Science Association への協賛などを通じて、複数の学問領域にわたって先端的な実験技術をもつ若手研究者の育成と、実験を用いる社会

科学者層の拡大に努めた。同時に、異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学推進事業「意思決定科学・法哲学・脳科学の連携による『正義』の行動的・神経的基盤の解明」（平成21年度～平成25年度）の中核メンバーとして、これまで人文・社会科学領域で規範的立場から扱われてきた「正義」の概念について、その認知・脳科学的な実証基盤を探るという国際的にも最先端の研究プロジェクトを成功させた。

脳と意識分科会では、第2部医学委員会の「神経科学」および「脳とこころ」両分科会と7年にわたり社会脳研究のさきがけとなるテーマを取り上げ、3分科会主催のシンポを毎年開催した。そのテーマは「脳と高齢化社会」、「脳と心の発達」、「社会性の脳科学」、「脳と教育」、「脳と睡眠」や「脳と意識」など融合的な社会脳に関わっている。2007-9年には東大、京大及び日本心理学会でシンポ「社会脳とは何か」を開催した。融合的な社会脳研究センター構想、3分科会共催シンポと分科会でのテーマ別の論議を集約し融合的な社会脳の展望を開く目的で、社会脳シリーズ（苧阪編・新曜社）を刊行中である。分科会委員も執筆陣に含まれている。

また、法と心理学分科会では法律の現場の問題を心理学がどう扱うのかに関する議論が進み、新学術領域研究「法と人間科学」では具体的な研究が行われた。さらにマスタープラン2014に「科学的な法の実務を支える研究・研修システムの構築」が採択されている。

## 6 心理学教育に関する取り組み

### (1) 背景

心理学は心の働きや仕組みに関わる問題を、内観報告を含むさまざまな行動指標を通して科学的に理解しようとする学問である。人は誰しも心に関してなんらかの興味を持ち、各人がさまざまな心に関する考えを持っている。しかし、人々の常識的な心の理解には、根拠の無い信念や論理的な誤りが含まれていることが多い。そのような誤謬を排除し、科学的に正しい心の理解を目指すのが心理学である。常識的な心の理解と心理学を区別するのは、多くの場合特殊な測定技法では無い。測定対象となる行動は、一般の人々が日常場面でも観察可能なものが大半である。心理学をこころの科学たらしめているのは、ふわっとした心の問題の構造を論理的に分析し、実験的に検証する方法を考案し、データから誤りの無い結論を導き出すという学問的態度にあるといっても良いかも知れない。

巷に溢れる「心理学」の中には、厳密な心理学的な態度から確認されたもの以上の言説が含まれていることが多い。成熟した社会においては、不確かな情報に惑わされず、何が事実で何が事実ではないかを、人々が自分で判断する能力を持つことが望まれる。人々が心理学的態度を正しく身につけるためには相応の訓練が必要である。

### (2) 初等・中等教育における心理学教育に関する活動

「心理学分野の展望2010」は、現代社会が抱える様々な問題に対処するためには、子どもときから心理学的なものの考え方、とりわけ自分自身の心について知ることが重要であり、初等・中等教育においても心理学的なものの考え方の導入を促進すべきであり、そ

のための啓蒙普及活動が重要である、と提案した。これに呼応する活動として、高校生に心理学教育を行う可能性を探るために、2010年3月に、日本学術会議と日本心理学会の共催で「高校生の心理学教育の可能性を探る」シンポジウムが開催され、大変な盛会となった。これをきっかけとして「高校生のための心理学講座」および「科学としての心理学市民講座」が各地で実施されている。

### (3) 大学・大学院の心理学教育に関する活動

大学の心理学教育のカリキュラム改革に関しては、心理学分野の参照基準検討分科会を中心に質を保証した大学心理学教育の検討が進んだ。この分科会の議論から、1. 心理学分野の定義、2. 心理学分野の固有の特性、3. 心理学を学ぶすべての学生が身につけることを目指すべき基本的な素養、4. 学習方法及び学習成果の評価方法に関する基本的な考え方、5. 市民性の涵養をめぐる心理学専門分野と教養教育との関わりの5項目からなる心理学分野の参照基準が報告される。

大学院教育に関して、文部科学省において平成23年度から開始された博士過程教育リーディングプログラムではいくつかのプログラムが心理学と関わっている。「広島大学：放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム (H23～)」「名古屋大学：PhDプロフェッショナル登龍門 (H24～)」「京都大学：京都大学大学院思修館 (H24～)」「大阪大学 ヒューマンウェアイノベーション博士課程プログラム (H24～)」「九州大学：持続可能な社会を拓く決断科学大学院プログラム (H25～)」「筑波大学：エンパワーメント情報学プログラム (H25～)」「京都大学：霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院 (H25～)」「豊橋技術科学大学：超大規模脳情報を高度に技術するブレイン情報アーキテクトの育成 (H25～)」などである。

「放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム」は、「放射線災害による人と社会と環境の破綻からの復興を担うグローバル人材養成」を目的とする。広島大学の放射線被災に関する諸領域の実績を背景に、医学、環境学、工学、理学、社会学、教育学、心理学、などの各専門学術分野を結集し、「放射線災害復興学」を確立して、放射線災害から生命を護る人材、放射能から環境を護る人材、放射能から人と社会を護る人材を育成するプログラムである。実践知を目指す今後の心理学を支える人材の育成が期待される。

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」は、霊長類をはじめとする野生動物に関する教育研究をおこない、地球社会の調和ある共存に貢献することを目的とする。その具体的な課題として、以下の3点が挙げられる。1) 絶滅が危惧される霊長類をはじめとする野生動物を対象とした研究・教育・実践を通じて、その自然の生息地でのくらしを守り、飼育下での福祉をはかるとともに、人間の本性についての理解を深める。2) フィールドワークとワイルドライフサイエンス等の多様な研究を統合してワイルドライフサイエンスと呼べる新たな学問領域を創生し、人間とそれ以外の生命の共生のための国際的研究と国際連携を推進する。3) 博物館や動物園・水族館等との協力により、実感を基盤とした環境教育を通じて、人間を含めた自然のあり方についての深い理解を次世代に伝える。それぞれの課題において、比較認知科学を中心とする心理学の果たす役割は大きい。

#### (4) 心理学専門職の国家資格化に関する活動

また、「心理学分野の展望2010」は、国際水準の心理学の高度専門職の教育プログラムと国家資格の早急な整備の必要性を謳っている。これに関して、健康・医療と心理学分科会では、専門職の国家資格化とそれを取り巻く医療現場の状況と対応について検討を行っている。特に、平成26年度から医療保険で点数化された心理テストの種類が多くなったことから、医療現場で種々のテストを実施できて、その結果に基づく心理アセスメント作成の能力を持つ心理専門家を至急養成することが必要となってきた。そのため、健康・医療と心理学分科会としては、医療現場における心理テストの実施と臨床心理技術者の実態や問題点を考慮しながら、医療における心理技術者養成のカリキュラム案をつけた提言又は報告を出す方向で検討している。また、このような実践的な心理専門家養成は、学士課程レベルの心理士資格を基礎に、医学のみならず、教育、福祉、裁判、産業も含む各種臨床教育に関する修士課程レベルの二段階養成が必要であるとの方向で検討が進んでいる。